

余市町でおこったこんな話

余市町でおこったこんな話その160

余市町の埋もれた歴史等を紹介し、改めて余市町を再認識するコーナーです。

漁夫の契約

大正から昭和のはじめ、12月になると翌年のニシン漁で働く漁夫の契約が始まりました。募集のために親方が東北地方へでかけたが、以前から働いてもらっている現地の船頭さんに契約を頼む方法などがとられました。親方がおむく場合、山形県鶴岡市の善宝寺へ大漁祈願のお参りに行くこともありました。

ニシンの漁獲量が安定していた積丹半島以北の定置網漁を営む漁家と比較的多かったのが、給料額をあらかじめ契約によって決定する方法でした。余市町でニシン漁を営んだ川内家の記録を見ると、12月下旬に契約金額のおよそ9割以上を前金としてもらい、3月から5月上旬まで働いて、その間に使った手袋や薬、タバコ代などを差し引いて精算し、漁模様によれば手当金が追加でもらえることもありました。

明治10年代、漁獲量が少なかった場合に約束した給料が払われなかった漁場があったのがきっかけで、前金制の契約がはじ

められたようですが、雇われた漁夫も前金を手にして逃亡する者が出るなど、社会問題となった時期もありました（『北海道の生業2』）。

大正14（1925）年、余市町中村漁場が秋田県山本郡内（現在の能代市とその周辺）の漁夫29人と契約しました。その時の旅行の記録がのこっています。出発前に必要となる書類の料や郵便代金、余市までの交通費や食費が秋田に送金されたのが2月25日、漁夫らが手荷物を携えて、それぞれの母村から馬車または徒歩で能代町（現在の能代市）に集合したのは2月末のことでした。その日は能代で1泊、翌日能代駅から汽車に乗り青森に着いてもう1泊、津軽海峡は連絡船でわたり、函館から函館本線で余市町へ到着しました。途中の大館（秋田県）、青森、函館、黒松内、俱知安で弁当とお茶が出されました。数日かかる旅の途中での無事を伝えるために青森、函館、森からは電報を打っています。東北各県から津軽海峡を越えて

北海道へ向かう漁夫は、多い時期には10万人とも言われ、鉄道や船に乗って更に北へ向かいました。しかし、その大半は鉄道を利用するののため、函館駅の混雑は相当なものでした。このため一般乗降客とのトラブルを避ける目的で稚内までの専用の臨時列車が増便されました。

昭和20年代はじめ、臨時列車が用意された時のことです。漁夫たちは縁起をかついで仏滅には出立せず、不漁になる行いを避けましたが、国鉄（当時）からすると誰も乗っていない、がらがらの列車を走らせる大迷惑行為で幽霊列車と呼んでいました。幽霊列車が走った翌日の臨時列車は、前日に乗る予定だった漁夫たちも乗り込んで大混雑し、あふれた漁夫が一般の列車に乗って問題を起したりもしたそうです（『まぼろしの鯨漁』）。



▲ 漁場を歩く漁夫
「にしん場レビュー」北海道タイムス
(昭和4年4月13日)

【北海道後期高齢者医療広域連合会からのお知らせ】 計画に関する住民意見募集について

北海道後期高齢者医療広域連合は、道内179市町村との連携のもと、後期高齢者医療制度を運営している特別地方公共団体です。

この度、広域連合では、広域連合と市町村が連携しながら処理する事務について定めた「第2次広域計画」及び被保険者の健康の保持増進事業のための「保健事業実施計画」が平成29年度末で終了することから、平成30年度からの新たな計画を策定します。

この計画の策定にあたり、次のとおり広く住民の皆さまからご意見を募集します。

募集案件 北海道後期高齢者医療広域連合第3次広域計画（原案）
北海道後期高齢者医療広域連合保健事業実施計画（第2期）（原案）

募集期間 11月29日（水）～12月28日（木）（必着）

計画及び募集要領は北海道後期高齢者医療広域連合ホームページ（<http://iryokouiki-hokkaido.jp/hotnews/detail/00000225.html>）または下記の場所で閲覧できます。

問合せ 北海道後期高齢者医療広域連合 ☎011-290-5601
保健課 医療グループ ☎21-2121